
絶対音声

密 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対音声

【Nコード】

N8958C

【作者名】

櫛 麻容

【あらすじ】

夢の中での出会いから、意識しだした。耳に残る声。それはどちらも同じだった。音が、声が二人を近づけていく。夢の中での『彼は、何を伝えたいのか』

1・夢の中で出会い

感覚が、無くなったのかと思った。

自分を取り巻く全てが白く、色を持たなかった。その中で鮮やかに存在するのは一人の人物で。

彼の名前を呼ぼうとしたが、声は出なかった。

「何なんだ…？」

汗で張り付く服に不快感を覚えながらも、泉水涼^{せんすいりょう}は夢を思い出そうとした。妙な浮遊感と共に、確かに心地良い雰囲気を感じた。あの鮮やかな印象は現実にはないもので、何故彼が出てきたのかはわからなかった。現実では、たまに彼に視線を遣うことはあったが、理由はなかった。

ない、と思っていた。

涼は思考を振り切り、学校へ行くために制服に着替えようとベッドから降りた。床から伝わる冷たさが、これを現実だと実感させた。

朝の人混みが嫌で、涼はいつも早くに登校していた。高校は中学より規模が大きく、電車は時間帯によってかなり混み具合が違う。始業時刻の三十分前は一般生徒は少なく、運動部の声だけが校舎に響いた。あと十分もすれば徐々に人が増えてくる。その十分の余裕が、涼に安息の時間を与えていた。

教室のドアを開けると、いつも通りに一人の生徒が姿勢正しく席に着いているのが目に入った。

「おはよう」

涼の挨拶に反応した生徒は振り向き、銀縁の眼鏡を押し上げて答

えた。

「おはよう」

形式的に返したただけだとわかる挨拶に、涼は苦笑した。彼が無愛想なのはいつものことだった。

黒瀬千尋^{くろせ ちひろ}。一年から同じクラスの優等生だった。入学してから試験で彼以外が一番を取ったことはない。全国の模試でも優秀な成績を修めており、教師から一目置かれている人物だった。しかし、生徒からの評判は悪かった。嫌みと取れる発言ばかりをして、無表情で愛想はなかった。教師に対しても特別良い子を演じることはなく、ただ当たり障りなく過ごしているように、涼には見えた。その千尋の行動の理由が知れたかった。その為、目で追っていることが度々あった。何度か目が合ったことがある。

涼は真ん中の列の前から二番目の席に座る千尋の席をちらりと見、その千尋から右隣の列の二つ後ろの自分の席へと座った。その角度からは、千尋の顔の輪郭が見てとれた。意外にも綺麗な輪郭を描いている。時折覗くペンを持つ手は男のものには違いなかったが、すらりと細い指がしなやかに見えた。

「…変態か」

涼は夢との相違を見つけようと千尋を観察している自分に気付き、自己嫌悪に陥った。見れば見るほど違いはなかった。夢では美化されていると思っていたが、そのままの千尋だった。涼は、何故自分が細部まで知っているかを疑問に思った。それほどまでに千尋を見たことはなかった。それなのに、夢では再現されていた。

思考に吞まれながらも、涼は鞆から教科書とノートを取り出し、ノートに書き込んでいった。考えていることと書くことは違う。英語の構文をすらすらと書きながらも、涼は夢の分析をしていた。夢は深層心理だということを聞いたことがあったため、涼には何か意味があるように思えて仕方なかった。その間も千尋は姿勢を崩さず、机に向かって何かを書いていた。

二人だけの静かな空間は、慌ただしく廊下を走る生徒の足音と、騒

がしい声によって壊された。十分間は高速に過ぎ去っていた。涼は次の時間の予習まで済ませたノートを片付け、訪れるであろう友人の襲撃に備えた。朝の短い時間も休憩であることには違いない。話しに興じるにはちょうど良かった。

「泉水！ 昨日なー」

涼の姿を見るやいなや話しだす友人に苦笑しながらも、涼は空いている席を勧めた。まだ登校してきていない生徒の席。その席に友人、葛西晃一^{かさいこういち}は座り、昨日あったことを話し始めた。

それを千尋が一瞬、不思議な笑みを浮かべて見ていたことを、涼は知らなかった。

2・教室で声をかけた

涼にとって、英語の授業は退屈だった。生徒が話す明らかな日本語発音の英語は不協和音のように耳に響き、涼はいらいらしながらペンを回して気を紛らわしていた。教師は、机の間を縫うようにして歩いている。教師の発音はまだマシな方で、読むなら教師が読めばいいのに、いつも思う。音に敏感な涼は、自分自身が不快な音を発しないように、英語の発音もネイティブに近いものを習得していた。そういった努力は惜しまない。

生徒の発表が終わり、教師は教壇に立った。

「二人組みで三十二ページの会話をすること。誰と組んでもいい」それを合図に、生徒は席を立ち、親しい友人の元へと移動していった。ある程度組み合わせは決まっていた。数人のグループで漏れた者は他の余った人と組み、自然と組は出来上がっていた。その中で、千尋はいつも一人だった。クラスの人数は奇数で、自然と教師と組むことが多かった。欠席者がいれば、余った者と成り行きで組むことになる。

いつものように一人残っていた千尋は席から立つことなく、教師が来るのを待っていた。

「黒瀬、一緒に組まないか？」

涼が掛けた声に千尋は振り返り、怪訝な顔をした。そんな顔をされる理由がわかり、涼は思わず苦笑いを返した。

「何で僕なの？ いつも組んでいる葛西くんは？」

「別にいつも組んでいるからって、今日もそうする必要なんてないだろう？ で、どうする？」

涼の誘いに、千尋は口の端を上げて頷いた。嫌みな感じがする仕種だが、反対に少し打ち解けた感じもする。それを確かめて、涼は千尋の隣の席に座った。

余った葛西は教師に誘われ、違う親しくしているグループへと逃

げていった。まだ誰が余るかわからない。

涼はそれを見届ける前に、千尋へと向き直った。千尋はじっと涼を見ていた。

「何？」

「いや、始めるよ。僕からでいいよね」

疑問形ではない言葉に、涼は頷いた。それを確認してから、千尋は教科書を読み始めた。流れるような英語は涼の嫌いなものではなく、むしろ好きなものだった。少し高く感じる声は耳に馴染む。千尋も涼も本読みで当てられたことはなく、互いに発音は知らなかった。

涼は千尋の声に聞き惚れていた。

「泉水くん？」

「ああ、ごめん。えっと…」

涼は自分が読む場所を確かめ、千尋に遅れないように読んだ。千尋が意外そうに顔を見ているのを涼は気付いていたが、気にせず読んでいった。千尋は遅れることなく続きを読み、会話は進んだ。

自然に流れる教科書の会話は数分で終わり、二人はすることがなくなった。他の生徒はまだ半分もしていないところで、どれだけ早く終わったかがわかる。周りを見回していた涼は、ふと千尋が何か口ずさんでいるのに気が付いた。リズムカルに口から漏れている声。「マザーグース？」

「…そう。よくわかったね」

驚いたように言った千尋に、涼は苦笑いを返した。『マザーグース』という名前は聞いたことがある人は多いが、実際に内容を知っている者は少ない。千尋が口ずさんでいたものは有名なものではなく、どちらかと言えばあまり知られていないものだった。

「好きなんだ。意味は無茶苦茶だけど、リズムがいいから。黒瀬は何で知っているんだ？」

「…僕も好きだから。ハンプティ・ダンプティがきっかけで。へえ、泉水くんも好きなんだ…」

小さく呟いた千尋の声は涼に届いていたが、涼がそれに反応する前に教師の声が聞こえた。涼は立ち上がり、自分の席へと戻った。途中で葛西とすれ違い、文句を言われたが、涼は不思議な笑みを返したただだった。その笑みの意味がわからず、葛西は首を傾げながらも自分の席へと向かった。

涼は、知らない内にマザーグースを口ずさんでいた。ふとそれに気付いた時、涼は口元を緩めた。

3・昼食に誘って

「変わってるよね、泉水くんも」

千尋は軽く溜息を吐いた。その呆れた様子に、涼は意地悪そうに笑った。向かい合うように座った千尋と涼。その間には弁当とパンがあった。千尋は弁当を突付きながら、前に座る涼と、横に座る葛西を見た。葛西は二人の様子を見ながら、自分のパンを取って開けた。

千尋がいつものように一人で弁当を食べようとしていたところに、涼は現れた。そして、椅子を引き寄せて座った。いつも涼と食べていた葛西は仕方ないというように涼に付き合い、椅子を引き寄せて二人の間に座った。

「いつの間に仲良くなったんだ？」

葛西の尤もな疑問に千尋は口を閉ざし、涼は奇妙な笑みを浮かべた。二人のその反応に、葛西は口を動かしながら眉を寄せた。

涼は机の上のパンを取り、それを弄りながら言った。

「仲良くなったというより、俺が黒瀬に興味を持っただけ。結構面白い人物だつてわかつてきたところ」

涼の言葉に葛西は生返事を返し、千尋は顔を顰めた。面白い、と評されたことに対して千尋が何か言いたいことが涼にはわかった。しかし、口にもものが残っていたために言えなかった。それを嚙下してから、千尋は固い声で言った。

「…面白いつて何」

「そのままの意味。意外性があるからな」

「泉水くんも同じじゃないか」

千尋は不満そうに涼を睨んだ。その鋭い視線を涼は飄々とかわし、葛西に同意を求めるように視線を送った。葛西は二人の空気についていけず、なんの反応も返すことなく食べ続けた。

千尋はそれに対して何も言わず、黙々とご飯を口に運んだ。正し

い持ち方で動く箸の動きは綺麗なもので、涼は感心して見ていた。涼は和食の作法は知識としては持っており、それを実践するとするとかかなり大変だということを知っていた。実際、まだ完璧には出来ない。そのため、人前で何かを食べるときはなるべく箸を使わないものを食べる。人の目を気にしているといえはそうだが、それよりも涼は自分が不快に思うことはやりたくなかった。発音にしても、箸の動きにしても、中途半端にはしたくない。

涼の視線に気付いた千尋は、それが箸に向けられていることを疑問に思った。見ていて楽しいものではない。

「泉水くん？ 箸が気になる？」

「ああ、ごめん。綺麗に持つんだな、と思って。動かし方も手本のようだし」

素直に褒めた涼はまだ千尋の箸を見ており、千尋は言葉に詰まった。そんなことを言われたことはなかった。所作一つ一つは幼い頃に教えられたもので、自然になっていた。そしてそれを気に留める者もおらず、千尋は当たり前のように振舞っていた。

しかし、涼は違っていた。一つ一つの動きに目を留め、良いところがあれば賞賛する。そんな涼の言葉が千尋には新鮮だった。

「…ありがと」

照れたように言った千尋に、涼は苦笑して答えた。嫌みなのはそう見えるだけであり、千尋自身は捻くれているわけではない。それが涼には律儀に挨拶を返すことから何となくわかっていた。

暫くの間傍観者だった葛西は、いつもと違う千尋と涼に何気なく聞いた。

「結構気が合ってる？」

「どうか。共通点は見つかってきたけど」

涼は数時間前のことを思い出して言った。英語に関しては共通点が二つある。発音とマザーグース。短時間で二つもあったのだから、もつとあるかもしれない、と涼は心が弾んだ。葛西とはどちらかといえは共通点はあまりない方で、だからこそ一緒にいて楽しいこと

があった。違う考えを持っているから、話が進むこともある。普通はある意見の衝突も、涼が葛西に対して持論を言わないことから少なかった。涼がこれだけは譲らない、というものだけは葛西が折れ、それ以外は涼が容認していた。

涼は容姿が良く性格も問題はないため、クラスでは人気がある方だったが、一緒にいるのは葛西が多かった。付き合う人数が多い程面倒なことになる機会が増える。煩わしいことは避けたかった。千尋のように徹底して人付き合いをなくす、というのも一理あったが、そこまで非情にはなれなかった。一人が嫌というわけではないが、一人でいて楽しいこともない。

「そういえば、黒瀬が一人でいる理由って何？」

涼の素朴な疑問に、千尋の動きが止まった。葛西は咽て苦しそうに息をした。葛西の背中を擦ってやりながら、涼は千尋にわからない、と顔に表した。特に意味はなく、純粹な疑問だということがわかる表情だった。

千尋は、涼に向かって眉を寄せて笑った。

「誰も寄ってこないだけだよ。こんな嫌みな優等生に近付きたくないからね」

自分で優等生、と言った千尋は自嘲気味に苦笑した。自覚して嫌みのように振舞っている。そう感じた涼は、何か意図があることを察したが、納得したように頷いただけだった。無理に踏み込もうとはしない。そこに踏み込んでいいところまで、自分は達していないことはわかっていた。

葛西は涼の爆弾発言に動揺したが、千尋の気にしていない様子にほっと息を吐いた。悪気がない涼の言葉は、時に核心を突く。それを知っている者は対処のしようがあるが、知らない者は勝手に傷付く。葛西はそんな涼が心配だった。

「泉水：お前、それはやめろって言っただろ…」

「それ？」

葛西の言葉に、千尋が聞き返した。葛西は初めて千尋に声を掛け

られ、一瞬動きを止めたが、何もなかったかのように困った顔で笑った。

「爆弾発言。妙に核心突くからさ、一拍置けって言ってんだよ。黒瀬は問題なかったみたいだけど、勝手に傷付いて責められることもあるんだ。正しいのは泉水なんだけど」

「…泉水くんらしいのかな」

妙に納得して苦笑した千尋に、葛西はそうだろ、と頷き返した。

涼は葛西の背から手を退け、無言でパンを口に運んだ。貶されてはいないが、褒められてはいない。何度忠告されても、口に出してしまうものは仕方なかった。

千尋は含み笑いをしながらも食べ続け、空になった容器を薄い布で包んだ。箸を仕舞おうとしたところを涼はじつと見ていた。箸先は三センチも汚れてはおらず、それだけで千尋の技量が知れた。和食が好きだからこそ、涼は正しい食べ方で食べたかった。それは決して無理なことではない。葛西は涼が何か考えこんでいるのを横目に、パンの袋を近くにあったゴミ箱に捨てて立ち上がった。涼は椅子を引く音に気付き、少し残っていた欠片を口に入れた。そして空の袋を細く折って結んだ。小さくなったゴミは放物線を描いてゴミ箱に入り、葛西と顔を合わせて笑った。

その二人の様子を横で見ていた千尋は、微妙な笑みを口に浮かべた。

「黒瀬？」

「なんでもないよ。次は選択科目だけど、教室移動は間に合うの？」

千尋の笑みに首を傾げた涼に、千尋は首を横に振って否定した。そして、机から教科書を取り出して移動の準備を始めた。涼と葛西は自分の席に戻り、各々必要なものを手に取って、決まっていたかのように千尋の元へと戻った。

千尋はそれに少し違和感を覚えたが、気にしていない涼と葛西を見て考えるのをやめた。

「葛西くんは美術で、泉水くんは…書道？」

授業で使う道具は教室にあり、持っていくものは教科書と筆記用具くらいだった。そして、教科書で受けている科目がわかる。千尋の手には音楽の教科書があり、葛西には美術、涼には書道のもがあった。三種類の授業は見事に重なってはいなかった。

「そう。美術って才能の問題だから。書道は得意なんだね」

教科書をペラペラと捲る涼に、葛西はそうそう、と可笑しそうに笑った。

葛西の反応が気にかかった千尋は教科書を脇に抱え、顔を顰めて二人の様子を見ていた。葛西は壁に掛けられた時計をちらりと見て時刻を確認し、足をドアに向けて歩き出した。

「美術がきっかけだったしな。無いものねだりってヤツ？」

「…そうだよ。才能って本当にある」

諦めたように溜息を吐いた涼は、葛西の後について歩いた。千尋も少し遅れて歩き出し、音楽室へと向かった。

「…なんで音楽じゃないの」

千尋の呟きは、廊下に響く生徒の声に掻き消され、誰の耳にも届かなかった。

4・放課後に残った

午後の授業が全て終わり、放課後を迎えた。部活に向かう生徒や、そのまま帰宅する生徒で廊下は賑わった。千尋は、優等生という名目で教師から頼まれたアンケート集計をするために教室に残った。面倒な仕事を押し付けられたとは思えない。しかし、千尋は断る理由がなかったために引き受けた。考えずに出来るものは、時間潰しには良かった。

千尋が十センチほどの紙の束を机に置いていても、手伝う者はいなかった。それはいつものことで、千尋は気にしなかった。この状態を望んだのは自分だということはわかっている。そして、下手に手伝ってもらって余計な仕事が増えるよりはマシだった。役に立たない手伝いはいらぬ。千尋は眼鏡を中指で押し上げ、紙の束に手を伸ばした。

「黒瀬、一人でやるんだ？」

横から掛かった声に、千尋は目線だけを動かした。そこには声から予想出来た人物、涼が立っていた。葛西もその後ろから様子を見ており、千尋は口の端を上げた。

そして、右手のシャープペンをくるりと回して頷いた。

「もちろん。いつものことだよ」

簡単に言った千尋は、会話は終了した、というように目線を用紙へと戻した。一枚一枚目を通し、集計していく。速い作業は見えて気持ちのいいものだった。涼は千尋の前の席に座り、向かい合うように座った。そして集計結果を記入する白紙の紙を手元に置き、紙の束を半分に分けた。葛西は涼の横に移動した。

千尋は突然の涼の行動に動きを止め、訝しげに涼を見た。

「泉水くん？」

「手伝うよ。手伝いなんていらぬかも知れないけど、それでも少しは違うだろ」

作業がしやすいように用具を配置していく涼に、千尋は呆気に取りられたが、とりあえず頷いた。涼が手伝うとなると、時間は短縮されることは間違いない。それを千尋は知っていた。千尋は呆然としながら、涼の横に立つ葛西に視線を向けた。葛西は鞆を抱えたまま、涼も帰る用意をしていたが、千尋を手伝うことで鞆を下ろした。

葛西は、千尋の視線にすまなそうに顔を歪めた。

「悪いな。俺は手伝えない。じゃあな、泉水、黒瀬」

「いや、ありがと。さよなら」

手伝えないことを詫びて帰ろうとした葛西に、千尋はその気持ちだけを受け取り、礼を言つて帰りの挨拶した。葛西は意外そうな表情を浮かべたが、可笑しそうに笑つて手を振つてから教室を出て行った。千尋にはその葛西の表情の変化の意味がわからなかった。

涼は、不思議そうに葛西が去った後も目を向けている千尋に対し、苦笑した。その苦笑に気付いた千尋は首を傾げた。

「黒瀬つて素直だよな。嫌みそうに振舞つてるから、知らなかった。葛西も意外だったんだろう」

素直、と言つた涼は、くすくすと笑いながら動かす手を止めなかった。千尋はなんとも言えない困つたような顔で、手元に残った紙に手を付けていった。そんなことを言われたのは初めてだった。素直というよりも、ただ咄嗟に言つただけのこと。それを二人は意外だと返し、笑顔を浮かべていた。

千尋は胸がざわざわするような感じがしたが、作業に没頭することとで気を紛らわせた。涼が手伝つたことにより、一時間はかかると思っていた集計が半分以下で終わった。まだ教室には生徒が数人残っていて、何人かが涼と千尋をちらちらと見ていた。珍しい組み合わせなのが気になるのだらうと予想できる。千尋はその視線を無視し、帰る仕度をした。涼は椅子を戻し、床に置いた鞆を手にとった。すぐに帰ることが出来るのに、涼はそのまま動かなかった。千尋は帰る用意ができ、鞆を手にとって帰ろうとした時、涼は当然のように千尋について歩いた。

「家がどこ知らないけど、校門までは一緒だろ？」

「そうだけど」

千尋は教室に視線を遣った。教室に残る生徒のほとんどが、千尋と涼を見ていた。不躰な視線に千尋は溜息を吐きたくなつたが、涼は気にしていない風で、出ていった。千尋は考えるのを止め、涼の後を追った。去った後で何を言われているか大体わかる。涼が気にしていないのなら、千尋は気にする必要がないと思い、思考を振り切った。

「で、黒瀬の家はどこ？」

「駅を越えて、少し行つたところ。小学校があるところの近く」

「近いんだな。それなら駅まで同じだ」

涼は確かめた後、千尋がついて来ることを確信した足取りで先を歩いた。

千尋は密かに笑みを浮かべ、すぐに表情を変えて涼の後を追った。

5・帰り道に約束をして

駅に向かう道を涼と千尋は並んで歩いた。道幅は広く、歩道があるために並んで歩いても問題はない。千尋は隣を歩く、自分より少し背の高い涼を疑いの眼つきで見ていた。一緒に帰ろうとした涼の真意がわからない。

その視線に気付いた涼は、横目で千尋を見た。

「何？」

「別に。そういえば、葛西くんと仲良いよね。美術がきつかけつて言っていたけど、何？」

涼の問いに、千尋は一瞬目を逸らしたが、すぐに思いついたように涼に目を向けて質問を返した。咄嗟に思いついたことだったが、気になっていたのには違いない。

千尋の質問に、涼は懐かしむように目線を上げ、そしてククツと喉の奥で笑った。

「明日、あいつに絵を見せてもらえばわかるさ」

楽しそうに、少し意地の悪い笑みに変えた涼は、速度を変えずに歩いた。涼の答えにしばらく考え込んでいた千尋は足の動きが鈍くなり、涼との距離は広がった。千尋は顎に手を当てて考えており、それに涼は気付かなかった。

少し歩いて、隣を歩いていた千尋がいなくなったことに気付いた涼は後ろを振り返り、千尋の様子を見て口元に笑みを浮かべた。

「黒瀬」

「……え？ ああ、ごめん。絵、ね。明日見せてもらうよ」

涼は千尋が追いついてから、また並んで歩き始めた。駅で別れるのだから、そのまま先に行ってしまうは良かったのだが、涼はそうしなかった。千尋は涼の一面を知り、その優しさに心が温かくなった。

駅で別れるまで、他愛もない会話は途切れることなく続いた。

6・MDを見つけた

「涼」

はつきりと自分の名前を呼ばれた。その声は知っているもので、声の持ち主はわかっていた。

振り返った先にいたのは頭に浮かんでいた人物で、彼は穏やかに笑っていた。その笑顔は見たことがなく、自分の想像であることが理解できた。

千尋はいつもとは違う、切なく感じる声で言った。

「声を聞かせて」

「声……？」

涼は思わず喉を押さえた。話すために声は出している。それなのに、夢の中の千尋は切実に訴えるように言った。涼は自分の夢なのにも係わらず現れる千尋とその言葉に戸惑った。理解できない。夢の中の千尋は何を望んでいるのか。そして、その夢を見る自分は何を思っているのか。

夢は深層心理の表れという言葉思い出し、涼は額に浮かんだ汗を拭って気持ちを入れ替えた。

深層にある意識が、何かを示している。

いつものように千尋は一番に教室に入り、人の気配が消えた空気を肌で感じた。これから嫌でも濃くなっていく。澄んだ大気を取り入れるために、運動場に面した窓を開けた。

全ての窓を開けて五分経ち、半分の窓は閉めていった。空気さえ入れ替われば、後の温度調節は人の多さによって変えれば良い。人の体温で、室温は微妙に変わる。一人では肌寒くなった教室を、

千尋は満足そうに眺めた。

そのとき後ろのドアが開き、涼が入ってきた。いつもとは違い、後ろに葛西が続いた。

「おはよう」

先に千尋が挨拶し、涼は軽く返した。

「おはよう」

「うわ、本当に黒瀬がいる。早いよな…おはよ」

千尋を認めると驚いたように口を開けた葛西は、感心したように頷いた後に短く挨拶した。

千尋はそれが癖だとも言うように、口の端を少し上げた。爽やかな笑顔とはほど遠いが、それでも涼と葛西には、それが悪意を含んだものではないことがわかっていた。

涼は自分の席に鞆を置き、一度も座ることなくまた入ってきたドアに向かって歩いた。手には四角い布の袋を持っていた。葛西も涼と同じように荷物を置いてドアへと向かった。

「黒瀬。葛西の絵を見るんだろ」

「え、うん。でもいいの？ 葛西くん」

二人の待つドアの前へと小走りで向かった千尋は、葛西の顔を窺うように見た。葛西はそれに楽しそうに口元を歪め、人差し指を立てて横に振った。

「いいぜ。黒瀬がどんな反応を見せるか楽しみだ」

ニシシ、と奇妙に笑った葛西は、前を歩いた。その後に、涼と千尋は続いた。涼は手に持っていた袋からイヤホンを取り出し、耳に着けた。形状からMDウォークマンだということがわかり、千尋はその中身が気になった。

「何聞いているの？」

「洋楽。何のかは不明」

「不明？」

不自然な答えに、前を歩いていた葛西は振り返って嫌な顔をした。器用に後ろ向きに歩き、三人は足を止めずに会話を続けた。

「またアレか？ 聴くの止めとけて。怪しいじゃないか」

「アレ？ 怪しい？」

不吉な単語に、千尋は眉を寄せた。涼は葛西の警告を聞き流し、二人の声は聞こえる程度に音量を調節して音楽を聴いていた。

葛西は呆れたように涼を見、それから苦笑して千尋に説明した。

「一週間に一回くらいの間隔で、泉水の靴箱にMDが入ってるんだ。中身は洋楽。気持ち悪いから止めるって言うてんだけど、曲が泉水の好みでさ」

「…へえ」

特に興味無さ気に頷いた千尋に、葛西は困ったように笑った。千尋も一緒に説得してくれれば、と思っていたこともある。しかし、千尋は個人の自由、とでもいうように、MDについてはそれ以上触れなかった。杞憂に終わればいいが、と葛西は思っていたが、それでも何か引つ掛かる。何度かそのMDを聴いたことがあるが、特に異常はなかった。しかし、脳裏に掠める何かが不快にさせる。涼は何も感じていない様子だったことから、葛西は深く追求することを止めた。

7・抽象的な絵を見て

教室から離れている美術室には、誰もいなかった。油絵の具の独特の臭いが鼻を擽る室内に踏み込んだ葛西は、一直線に向かつて行った。そして迷うことなく一枚の絵を持ち、千尋に向けた。千尋は近くに寄り、その絵を眺めた。

「教会：？」

ぼつりと呟いた千尋に、葛西は目を見開いた後、喜びで表情を崩した。千尋はその葛西の反応に、驚きで声が出なかった。その後ろで涼は二人の様子を興味深そうに見ていた。

「よく分かったな。慣れてきたら大体分かるようになるみたいだけど、一目で分かるなんて……」

千尋に向かってにこにこ嬉しそうな表情を浮かべた葛西は、自分の方へと絵を回転させた。キャンバスには赤を基調とした、形が曖昧なものが描かれていた。抽象的すぎて、ぱっと見ただけでは分からない。十字架もなければ、聖母も描かれてはいない。しかし、千尋には分かった。千尋はただ、絵から感じるものを言葉にただけで、はつきりと確信を持っていなかった。そのため語尾を疑問系にした。葛西の喜びようから、それは中々人に理解されないものだとはなんとなく分かった。

「きっかけて、もしかして」

「そう、泉水も見抜いたんだ。こいつのときは確か海の絵だったよな」

確かめるように聞いた葛西に、涼はそうだと首を縦に振った。葛西は持っていた絵を元に戻し、奥の部屋へと入って行った。葛西の意図が分からずにその場で待っていた千尋は、涼の顔を見た。まだ耳にはイヤホンが着けられており、涼は視線だけで返した。涼の視線は葛西が消えていった奥の部屋へと向けられていた。

一分も経たない内に、葛西は同じ大きさのキャンバスを手に、二

人の前に立った。そして、発表するかのように堂々と絵を引っくり返した。

そこに描かれていたのは、一面の深い蒼だった。少し濃淡があり、緑が所々に隠れていたが、全体的に眺めると蒼と白以外の色は見出せなかった。

今度は、千尋にははつきりとその絵がわかった。

「…確かに海だね。空との境目が曖昧だけど…」

千尋の感嘆するような呟きに、葛西は何度も頷いた。その度に絵も揺れた。

涼はイヤホンを外し、葛西の持つキャンバスに触れた。油絵のそれは葛西の個性が出ていて、凹凸がはつきりとわかる。軽い感じに見られる葛西だが、絵に関しては類を見ない技術を持っていた。しかし、それは教師に認められるものであっても、同世代には通じない。葛西の感性が余すところなく表現された抽象的すぎる絵は、涼だけが理解できた。それがきつかけだった。いつもなんとなく付き合ってきた友達とは違う、自分を理解する人物は、傍にいたことが苦痛ではなかった。話を合わせなくてもいい。適当に相槌を打たなくてもいい。それが息抜きできる、涼と葛西の関係だった。

今その二人の中に踏み込んだ千尋は、何も言えずに沈黙を保った。懐かしむように絵に触れていた涼は、さっと千尋の手を取り、さっきまで自分が触れていた部分に当てた。蒼が薄くなり、白に近くなっている部分だった。

「ここが空と海の境目。緑が少し見えるけど、わかるか？」

8・手が触れた

涼が人差し指を添えた千尋の中指は、凹凸をなぞった。微かに感じられる境目は千尋に何も与えなかった。ただ、千尋は涼に握られた手に神経が行き、まともに絵が見れなかった。同性でも手が触れることはほとんどない。久しぶりの人との接触到、千尋は体が固まった。嫌ではなかったが、それでも慣れない。

「黒瀬？」

反応を返さない千尋の顔を窺うように覗き込んだ涼に、千尋は顔を歪めることしかできなかった。ずっとキャンバスを手に二人の様子を見ていた葛西は、千尋の表情に失笑した。

「泉水、手を放してやれ。黒瀬が固まってるだろ。誰だって突然手を握られたら動揺するっつの」

葛西の忠告に納得した涼は手を放した。千尋は自由になった手を開いたり握ったりして確かめた。まだ、涼に掴まれた感覚が残っている。少し低い体温は自分とは違うもので、容赦なく体温を奪っていった。熱いものは冷たいものに吸収される。離れるときには近くなっていた手の温度に、千尋はくすりと笑った。

千尋が何に対して笑っているのかと涼と葛西は目を合わせたが、その疑問は予鈴の音に掻き消された。美術室から教室まで、急いでも三分はかかる。予鈴は授業開始の五分前の合図であり、三人は慌てた。葛西がキャンバスを片付けに行くのを待つて、三人は教室へと向かった。廊下を走っているのを擦れ違った教師が咎めたが、千尋が軽く頭を下げて謝罪した。千尋が廊下を走っているという事実には教師は驚いたが、それでも礼儀正しい千尋に無言で急ぐことを促した。

追いついた千尋に、葛西は呆れたように笑った。

「丁寧なことだ」

「それが僕なんだよね？」

ニヤリと何か企んでいるような笑みを浮かべた千尋に葛西は絶句し、その後に可笑しそうに笑った。涼は何も言わず、楽しそうに二人を見ながら走っていた。

三人が教室に着いたのは、本鈴の一分前だった。

休憩時間は十分ずつしかないので、千尋は宿題の時間に充てていた。話していれば短い十分だが、問題を解くには充分だった。宿題は家に持ち帰るときもあれば、全て終わってしまうときもある。千尋が座ったままでの涼は確かめ、鞆からイヤホンだけを出してMDを聴いた。葛西は十分の休憩時間はいつも他の仲良くしているクラスメイトと話している。涼は机の上に目を向け、前の授業の教科書が広げたままあったため、出された宿題に手を付けていった。音楽は耳を素通りする。宿題は授業の復習のような問題ばかりで、涼は休憩時間の終わりを告げるチャイムが鳴る少し前に全てを終わらせた。

9・音楽室で出会った

昨日と同じように、涼、千尋、葛西は三人で昼食を取った。千尋が一人で食べようとしているところに、当たり前のように涼と葛西は集まった。千尋は意外そうに目を丸くしたが、癖になっている口元だけの笑みを浮かべ、二人を受け入れた。

ほとんど会話はなかったが、気まずい雰囲気ではなかった。いつも明る過ぎるくらいに振舞っている葛西も、特にはしゃぐこともなく静かに会話をしている。どちらが本当の葛西なのか千尋にはわからなかったが、涼は平然としてることより気に留めなかった。流れる空気は不快なものではない。三人はそう感じていた。

「黒瀬が入っても、変わらないな」

葛西の漏らした言葉に、涼は格好良いと言われる顔にっこりと笑みを浮かべ、千尋は動きを止めた。しかしすぐに箸を持ち直し、口に運んだ。葛西は何事もなかったようにパンに齧り付き、涼は野菜ジュースを飲んだ。

このとき、千尋が微かに目を細めたことに、二人は気付かなかった。

放課後、涼はいつものように早く帰る葛西に別れを告げ、帰る準備を始めた。机の中には重い辞書だけを残し、その他の教科書類を鞆に詰める。辞書は家にもあるため、持ち帰る必要はなかった。涼は本が詰まって重さが増した鞆を肩に掛け、教室を見回した。

教室にはまだほとんどの生徒が残っており、いなくなった生徒の方が少ないほどだった。そのいなくなった生徒の中に千尋が入っていることに、涼は気付いた。千尋の席に鞆はなく、隙間から見える机の中には何もなかった。

涼は千尋が先に帰ってしまったことを少し残念に思ったが、帰る

うと靴箱に向かって歩き出した。教室を出たところで、朝に見た葛西の絵を思い出し、涼は美術室に寄ってから帰ろうと思い直した。葛西が今、美術の時間に書いている絵が気になる。涼は美術室、書道室、音楽室がある棟へと歩いて行った。

一階には書道室があり、目的の美術室は二階にある。書道部が活動しているはずだったが、物音はなく、しんと静まった一階の廊下を過ぎ、階段を昇って行った。段数が多いわけではないため、すぐに二階に着いた。踊り場で一息吐いた涼は、美術室へと向かおうとした。その時、涼の耳にピアノの音が入った。微かな旋律だが、涼にははつきりと捉えられる。音楽室を使う部活が休みの日だったと思い出した涼は、そのピアノを弾いている人物に興味を持った。足は自然と階段を昇り、あつという間に三階へと着いていた。

より一層明瞭になった音は優しく、そして上手かった。曲に技術がついていつている。かなり高度な技術が必要とする曲が終わり、少し間を空けて、また演奏は始まった。涼は音を立てないように、教室の後ろのドアを開けた。

ピアノを弾いている人物はそれに気付かず、音が途切れることはなかった。ピアノの前に座る人物を見たとき、涼は驚いたが、何故か納得した。

そこにいたのは千尋だった。

譜面はなく、全部覚えている様子の千尋は視線を指先に向けていた。そのため、涼には気付かず、切ない表情を浮かべて弾き続けた。涼は大きく深呼吸をし、口を開けた。

突然の声に、一瞬音は切れたが、何事もなかったかのように続いた。千尋は指を動かしながら顔を上げて、涼の姿を認めた。涼は左手を胸に当て、口を大きく開けて歌っていた。その口から出る歌声は透明なソプラノで、地声からは想像できないものだった。地声も耳に良く通るが、歌声は比較できないほど耳を抜ける。教室の一番後ろで歌っているのにも係わらず、かなりの声量で響いた。千尋は

涼が曲の初めから歌っていることに気付き、その通りに弾いていた。

千尋が奏でるピアノと涼の紡ぎ出す歌声は、互いに主張しながらも溶け合っていた。聴衆がいらないことより変な力が入らず、二人は伸び伸びと自分の力を出した。

千尋の指が最後の音をなぞったとき、涼は胸に置いていた左手を下ろした。

「…黒瀬って、ピアノ上手いんだな」

「泉水くんこそ、歌声が透明だよ。アヴェ・マリアをここまで歌いこなす人、それも男の人なんて知らないよ。歌が上手いのになんで音楽を選ばなかったの」

「歌は趣味だから、歌いたいときに歌う。中学まではテストのときに歌っていたけど」

二人は互いに褒め、技量を認めていた。千尋は意識的に言わなかったが、事前に涼の歌声を知っていた。だからこそ、千尋は涼が選択科目で音楽を選ばない理由がわからなかった。趣味、と言い切った涼はさっぱりとしていて、千尋はそんな涼に何も言うことはなかった。千尋も音楽を選択しているが、ピアノは弾かない。人前では簡単に見せないのは同じだった。

涼はゆっくりとピアノへと向かい、千尋の横に立った。千尋は涼から視線を逸らすことなく動作を見ていた。無駄な動きがない涼は見ている気持ち良いものだった。千尋は嗜みで歩き方などの所作は身に付けていたが、それに劣ることはない。

涼は千尋に嬉しそうに笑った。

「この棟に来て良かった。黒瀬のピアノが聴けたし。今日はたまたま？」

「この教室が空いている水曜日にいつも来てるけど」

「また来ても良いか？」

涼の許可を求める問いに、千尋は考えることなく頷いた。断る理由はなかった。涼との演奏を楽しんでいたのは確かだった。涼も同

じ思いだったことがわかり、千尋は目を細めて笑った。その千尋の笑顔と承諾に、涼は表情を緩めた。

涼は本来の目的である葛西の絵のことはすっかり忘れてしまい、千尋の演奏を聴いていた。その中で一曲だけ歌い、千尋がピアノの蓋を閉めて終了した。

また昨日を同じように、涼と千尋は駅まで並んで歩いて帰った。

10・黒瀬千尋と姉と

「お帰り、姉さん。早速で悪いんだけど、またお願いできるかな」

千尋はリビングで寛ぐ姉、唯ゆいに笑顔で言った。唯は鞆から使われた白衣を取り出しながら、苦笑った。研究室から帰って来て早々に言われたお願いだったが、弟の笑顔には弱い。唯は白衣を洗濯機に入れ、自分の部屋に向かった。その後に、千尋は続いた。

「今度はどうしたいの？」

パソコンの電源を入れた唯は椅子に座り、前に立つ千尋に聞いた。千尋は一枚の紙を差し出し、それを唯は受け取った。そこに書かれた言葉を理解したとき、唯の表情は曇った。

「…本当にコレでいいの？ コレだと…」

「コレでお願い」

千尋は唯の言葉を遮った。有無を言わせない千尋の様子に唯は溜息を吐き、キーボードを叩いて編集し始めた。

千尋は画面を唯の肩越しに見て、満足した笑みを浮かべた。

「本気なのね？ 恋愛としての好きなのね？」

「…今は。前は純粹にただ一つを望んでいたのに、それが満たされると次が欲しくなる。今はもう、単純な好きでは済まなくなってる」
千尋の真剣な声は、唯に届いた。弟だからこそ、望んでいることをしてあげたいという気持ちがある。しかし、今やっていることは、相手を傷つける結果になることはわかりきっていた。

唯は作業完了を知らせる画面に顔を顰め、顔を元に戻してから千尋を振り返った。

「この手段が悪いことだとわかっていても選ぶのね…。私だけはあるあなたを責めないから。私も関わっているからというのもあるけど、相手についても何も言わない」

「…ありがとう。姉さん、好きだよ。この人の次に」

この人、と紙を指した千尋に、唯は困ったように笑った。この結

果はわかっていた。相手だけではなく、千尋も傷付く。それは千尋にもわかっていた。それでも、それしか方法はなかった。止められるなら、最初から選ばなかった。

唯が差し出したモノを、千尋は迷うことなく受け取った。

11・好きなモノと

葛西は一人、始業時刻の四十分钟前に学校に来ていた。美術の時間だけでは教師の勧めるコンテストには間に合わない。放課後は時間が作れないため、葛西は早く登校していた。運動場から声は聞こえるが、校舎は静まりかえっている。葛西は正門を抜け、靴箱へと向かった。

そこには誰もいないと思っていたが、先客がいた。葛西はその先客が千尋だとわかり、声をかけようとしたが、止めた。千尋がいる前は自分のところではなかった。後ろ姿からは表情が窺えなかったが、葛西は何故か声をかけない方が良いと判断した。

千尋が立ち去った後、葛西は千尋の立っていた場所で足を止めた。そこは名字が「さ行」のところであり、その中に涼の靴箱も含まれていた。

葛西は確かめるために、涼の靴箱を開けた。

そこには予想通り、一枚のMDが入っていた。

「黒瀬：？」

MDは千尋が来る前から入れられていたのかもしれないが、千尋が入れたと考える方が自然だった。葛西はそのまま靴箱の蓋を閉め、考え込みながらも靴を履き替えて美術室へと向かった。

千尋から送られていたMDだとわかり、葛西は安心した。聴いたときに嫌な感じがしたのは確かだったが、杞憂だったと思った。葛西は涼には秘密にしておこうと、美術室へ向かう中、密かに微笑んでいた。

涼は葛西から、コンテストのために朝に美術室で絵を描くということを知っていた。いつもの時間に登校した涼は、教室に千尋がいるのを見て、挨拶の後に言葉を続けた。

「葛西が美術室で絵を描いているんだけど、一緒に見に行かないか？」

「いいね。ご一緒させてもらうよ」

涼の誘いに二つ返事で返した千尋は開いていた本を閉じ、席を立った。千尋が隣に並んでから、涼は美術室に向かつて歩き出した。

美術室へと向かう廊下に、人の気配はなかった。美術室がある棟は文化部が使用しているだけで、文化部は余程のことがない限り、朝に活動することはなかった。葛西は美術の教師から鍵を預かり、一人で描いている。

涼は今朝靴箱に入っていたMDをウォークマンに入れ、人の声が聞こえるくらいに音量を下げて聴いた。千尋はそれを見ながら、遠慮がちに涼に尋ねた。

「葛西くんの絵、そんなに好きなの？」

「まあね。感覚的なもので好きかな」

抽象的な葛西の絵は感覚で受け取るものが大きい。千尋にもそれがわかるため、くすつと笑って頷き、顔を前に戻して歩いた。

涼はなんでもないかのように、不意にさざりと言った。

「黒瀬のピアノも好きだけど」

弾かれたように涼に顔を向けた千尋は、涼の薄い笑みに言葉を返せなかった。千尋は開けた口を閉じ、じっと涼を見てから早足で美術室へと向かった。

涼は後ろから見えた、千尋の赤く染まった耳に微笑した。顔も紅潮しているに違いなかった。

12・音のイメージが重なる

「今回は夕焼け？」

片付けを始めていた葛西の背後から、涼は絵を覗き込んだ。キャンバスは赤と黄色などの暖色で塗りつぶされていた。所々に白が微かに混じっている。完成が近い絵は、もう何が描いているかわかるほどになっていた。しかし、それが理解できる者は限られている。

葛西は筆を洗いながら、涼に頷き返した。パレットはもう片付けられていて、あとはキャンバスを直すだけという状態になった。しかし、油絵の具独特の臭いが辺りを充満している。それは絵の存在感を強くさせているようで、涼は息を大きく吸って吐いた。その時、喉から高音が漏れた。透明な、ソプラノ。それは聖歌の一部だった。口を閉じた涼は反応を窺うように、葛西に視線を向けた。

「…そんな音のイメージってことか」

納得したように苦笑した葛西は、絵の具が付かないように注意を払いながらキャンバスを手に取り、眺めてから片付けに行った。奥の部屋が絵の具を乾かす専用の部屋になっている。葛西はすぐに絵を置いて涼と千尋の元へと戻った。

千尋が考え込むように顎に手を当てているのを見て、葛西は声を掛けた。

「黒瀬？」

「あの音が絵のイメージ…うん、合うかも」

千尋は顎から手を放し、軽く指を鳴らした。夕焼けはどちらかといえば低めの音のイメージがある。しかし、葛西の描く夕焼けは高音で合っているような気がした。

葛西はそんな千尋に薄く笑い、思い出したかのように千尋に聞いた。

「そっといえば、黒瀬って泉水の歌聴くのは初めてじゃないか？」

「いや、昨日聴いたよ。その前にも一回聴いたことがあったけど」

千尋の答えに、葛西はふーん、と軽く何度も頷き、涼は驚いて固まった。千尋が前にも聴いたことがあったとは思っていなかった。昨日の音楽室での千尋の反応は、聴いたことがあるとは思わせなかった。それは先入観があったからかもしれない、と涼は思い直した。葛西はそんな涼の表情の変化を横目で見ながら、千尋に可笑しそうに尋ねた。

「いつ聴いたんだ？」

「去年のクリスマス、駅前でストリートミュージシャンに混じって歌っているところを。葛西くんもいたよね」

疑問ではなく言い切った千尋に、葛西は少し考えてから頷いた。確かに、去年のクリスマスは涼と出掛け、涼が駅前で歌ったことを覚えていた。

「あのときのを聴いたのか。あれは凄かったからなー」

葛西は懐かしむように言い、時計を見てから歩き出した。予鈴が鳴るまで余裕があつたが、歩いて教室に戻るにはギリギリになる時間だった。二人は葛西の後に続いた。

涼はイヤホンから流れる曲がちょうどクリスマスに歌った曲だったことに、口元を緩めた。

13・クリスマスの夜に

クリスマスの夜は、気温が平年より低い予報だった。そのため、ホワイトクリスマスになるかもしれない、といつも以上に浮かれる人々で駅は賑わっていた。様々な電飾が街に溢れている。

涼と葛西は二人で商店街を歩いていた。

「なんか寂しい男二人って思われそう」

「実際そうだろ。絵が完成していたら、こんなに人が多いのがわかっていて外に出ないさ」

涼の不満が籠った言葉に、葛西は両手を合わせて顔を歪めた。それに対して涼は気にするな、と口の端を上げた。本当に気にしていなかった。無理をして葛西に付き合う必要はなかったが、涼は葛西が絵を完成させるまで付き合っていた。

大きなコンテストに応募する絵は何度も色を重ねていったので、時間が掛かった。授業では間に合わなかったために冬休みになっても学校に通うことになり、葛西は一人登校していた。涼は葛西からそれを聞き、出来る限りは付き合うことにしていた。いつもより力の入っている絵を楽しみにしていた。

出来上がった絵は涼の予想を嬉しく裏切るもので、涼は思わず溜息を漏らした。その溜息に葛西は満足して絵を眺めた。絵が完成したのは締め切り前日のクリスマスになり、美術室を出たのは空が暗くなり始めた頃だった。

「良いクリスマスだった。あの絵を見れたから」

「……恥ずかしいヤツ。ま、力作だからな。聖夜にはぴったりかもな」
涼は数時間前に見た絵を思い出して頷いた。今回葛西が描いたのは、木漏れ日だった。光を再現するのは難しく、抽象的でも表しにくい。それを涼にはわかる形で葛西は表現した。

涼はクリスマスなのにもかかわらず駅前で歌うストリートミュージシャンを見て、悪戯を思いついたかのように笑った。その表情を

見た葛西は諦めて見守った。涼は歌っている彼らの方へと向かい、歌い終わるのを待った。

演奏が終わると同時に、涼はキーボードを弾いていた人物に声を掛けた。

「ソの音、くれる？」

突然声を掛けられた相手は驚いたが、それでも要望どおりにソの鍵盤を押した。その音を覚えた涼は喉の奥でその音を出し、唾を飲み込んだ。そして大きく口を開けた。

柔らかいソプラノの音が一瞬、辺りに響いた。人々の喧騒は相変わらずだったが、涼の声は歌を聴きに集まっていた数人にははっきりと聴こえていた。

「アメージング・グレイス……」

歌声を聴きつけて集まった一人が呟いた。聖なる夜に合う曲だった。女性が歌うことが多い曲を、難なく高音を操って歌っている涼。体にぴったりとした膝までの長さのコートは黒で、神父の衣装のように見える。

葛西は呆れたように腕を組んで、聴衆の一番前で聴いていた。

涼は後半の、最も高い音を伸べる声で出した。聴衆の息を呑む音が聞こえた。涼が最後の音を出した後、静寂が辺りを包んだ。喧騒が遠くに聞こえる。

歌い終わり、涼はその場を離れようとした。足を一步踏み出したとき、拍手がぱらぱらと起こり、それは相乗して広がった。囲んだ円に拍手が響く。

「アンコール！」

一人が叫び、後に何人かが続ける。アンコールを求める声は大きくなり、涼は困ったように葛西を見た。葛西は仕方ないだろ、とでも言うように頷いた。

涼はもう一度同じ場所に戻り、一息吸った。肩が上がり、その動きに聴衆は段々と静まっていった。

第一声から、ほとんどの聴衆には何の曲かわかった。クリスマス

に歌う曲、『きよしこの夜』。それを英語で歌う涼に、集まった人々は柔らかな表情で聴いていた。単調だが、優しく響く曲。何度も聴いたことがあるが、それでも良い曲に変わりはない。

聴衆の中に、千尋はいた。母親に頼まれた茶道の道具を買いに出で、たまたま駅前を通っていた。街の喧騒の中から聴こえた音は人の声で、千尋は惹かれるように足を運んだ。少しずつ集まりだした人に混じり、歌う人物を見た。

アカペラで歌う涼は、聖夜のためだけに現れた存在のように見えた。黒のコートが神秘さを増す。無表情で歌っていたが声に感情が籠っていて、その差が余計に聴覚を鋭くさせた。

千尋はこのとき、初めて涼を知った。クラスメイトになってから、半年以上を過ぎてのことだった。

14・声が聴きたかった

距離が縮まっていた。

彼はいつも学校で見ている学生服を着ていたが、一つ違っている所があった。

眼鏡を掛けていない。

「涼」

前回と同じようにそう呼んだ千尋に違和感はなかった。慣れではなく、当然のように思える。眼鏡を外したことにより、千尋が意外と整った顔をしていることを知った。嫌みな感じはなくなり、人を寄せ付ける雰囲気を纏わせている。そんな千尋は知らなかった。

初めて口を開き、最初は出せなかった声が抵抗なく出た。

「黒瀬……」

「千尋。僕は千尋だよ」

につこりと笑った千尋は顔を寄せた。いつもはレンズ越しに見る瞳が至近距離で瞬く。千尋は目を細め、吐息が掛かる距離まで詰め寄った。

動悸が高まっていくのを感じる。

千尋は耳元で囁いた。

「君の声が聴きたいんだ」

高鳴る心臓に手を当て、涼は勢い良く目を開いた。いつもの見慣れた天井だけが見えた。

冷たい汗が額に浮き、涼は手の甲で拭った。まだ、千尋が囁いた言葉と吐息の熱さを覚えている。

「黒瀬……？」

夢の中での千尋は確実に近付いている。それが示すものが何か、

涼には見当もつかなかった。しかし、動悸は昔に感じたことのある種類だということはわかっていた。だからこそ、相手が千尋であることに戸惑っていた。

涼は髪を掻き揚げ、苦々しそうに唇を噛み締めた。

「おはよう」

教室のドアを開けると共に聞こえた声に、涼は動きを止めた。ドアの開く音を聞いて振り向いた千尋は、反応を返さない涼に眉根を寄せた。いつもとは違う、気まずい空気が流れる。

涼はその視線に曖昧に挨拶を返し、自分の席へと向かった。鞆を置き、一息吐いた涼は、机に腕を投げ出して突っ伏した。

朝から疲れたような気がする。手探りで鞆からイヤホンを取り出し、MDを聴いた。曲名のわからない歌が流れる。

涼は腕に頭を置いて横へ向いた。机に影が落ちたことに気付き、顔を上げた。

「どうしたの？ 気分が悪い？」

心配そうに見下ろす千尋に、涼はぎこちなく笑いかけた。

「いや、大丈夫。…黒瀬、眼鏡取ってもらえるか」

千尋は疑うような眼つきをしたが、何も言わず眼鏡を外した。やはり眼鏡を外すと印象は変わったが、夢の中で見た千尋そのままだった。

涼は呆れたように笑みを零し、短く礼を言ってから腕に顔を埋めた。千尋が声を掛けようか迷っていると、涼は体を起こし、顔を引き締めて耳からイヤホンを取った。

「別にいつか。まだ確定しているわけじゃない」

不可解な言葉を残し、涼は千尋に軽く微笑んでから教室を出て行った。

千尋は眼鏡を外したまま、難しい顔をして涼の出て行った方向を見ていた。

15・それは不協和音のようで

水曜日の放課後、音楽室に二つの影があつた。ピアノを弾いている千尋に近い席で、涼は演奏を聴いていた。歌いたいときに歌う、という言葉通り、涼は時折ピアノの音に合わせて歌っていた。ソプラノの曲だけではなく、普通の曲でも歌う。三オクターブは出る音域の広い涼の声に、千尋はいつも驚かされていた。曲一つ一つで表情がまるで違う声。

「その声、好きだよ」

不意に漏らした千尋の言葉に、涼は口を噤んだ。前に千尋に言った言葉と同じだが、言われる側になると反応が出来なかった。

歌うのを止めた涼に、千尋は指を動かしながら苦笑した。

「言われる気持ちがあつた？」

「…ああ」

素直に頷いた涼は、気が抜けたように近くにあつた椅子に座った。くすくすと笑いながらも、千尋は弾き続けた。

終わりを知らせるチャイムの音が聞こえるまで、二人は音が溢れる空間にいるのが習慣になつていた。

「黒瀬」

千尋は目の前に立っていた。名字と呼ばれ、仕方ない、という表情をした千尋は手を差し出した。握手を求めるその動作に、躊躇いながらも手を出した。

前は自分から重ねた手を、今度は千尋が受け取った。前と同じ温もりが手から流れてくる。

「涼」

夢で名前を呼ばれることが嬉しく感じる。現実では呼ばれることのない名前。

そして、呼べない名前。夢の中でも呼ぶことが出来なかった。

「…黒瀬」

その言葉に、千尋は困ったように笑った。

葛西の絵が完成するということを聞きつけ、千尋は普段より二十分早く登校した。靴箱を覗くと葛西はすでに来ていて、千尋は教室に寄って荷物を置いてから、美術室へと向かった。朝に新鮮な空気を肺一杯に吸い込み、吐き出す。そして、美術室のドアを開けた。油絵の具の臭いが充満している。

千尋はその臭いが嫌いではなかった。

「おはよう、葛西くん」

ドアの開く音には反応せず、掛けられた声に反応した葛西は振り向いた。千尋の姿を認めると、軽く挨拶を返し、再び絵に向かった。少し小さめのキャンバスに広がる色は、青や緑などの様々な寒色が混ざり合っているにもかかわらず、淡い感じになっていた。やはり、白が目立たない程度に曲線や筋を引いていた。前回の夕焼けではないが、こちらも完成が近いことが千尋にはわかった。

「あれ、雨の絵？」

「そう。さすがだな、コレがわかるなんて」

口元に笑みを浮かべた葛西は、弾んだ声で言った。理解されれば嬉しい。雨を表現するのは難しく、抽象的ならば余計にわかりにくい。しかし、それを千尋は言い当てた。躊躇うこともなく、さらっと正解を言ったことが葛西は嬉しかった。

葛西が色を重ねていくのを見ながら、千尋は首を捻った。

「前の夕焼けは？」

「あれは完成した。これも同時に描いていたんだ。これが完成したら、並べて見てほしいからな。今は見せられない」

何かを企んでいるかのように忍び笑いをする葛西に、千尋は無言

で頷いた。無理に見せてもらおうとは思わなかった。気にはなっていたが、いずれは見せてもらえるということがわかったのだから、それで良かった。

千尋は葛西の背後に立ち、仕上がっていく様子を見ていた。

「黒瀬、お前だったんだな。泉水にMDを送っていたのは」

葛西の指摘に、千尋の体は震えた。見られているとは思わなかった。誰もいないのを確かめて、細心の注意を払っていたのに、葛西には見られていた。

千尋が苦い顔をしたのは、葛西には見えなかった。葛西は絵から視線を外さず、いつもの調子で言葉を続けた。

「安心した。あのMDが黒瀬からのものだってわかったからな。嫌な予感がしたんだけど、杞憂だったみたいだな」

クツクツと笑う葛西に、千尋は何も言えなかった。葛西は千尋を信用している。それがわかるからこそ、千尋は言えなかった。

しかし、それ以上に黙ってはいられなかった。

「杞憂じゃないよ。あれは僕の我が儘だから。…全てを知ったら、きつと君も泉水くんも、僕を非難するよ」

不吉な言葉を残した千尋は、別れも言わずに教室を出て行った。いつもと違う千尋の様子に、葛西は顔を顰めた。MDを自分の我が儘だと言った千尋。そして悪い結果を引き起こすと断言した。

葛西は描きかけの絵を見ながら、MDを聴いたときに感じた嫌なもやもやが増えていくのを感じていた。

「あれ、葛西一人？」

開け放されていたドアから涼は声を掛けた。その声に振り返った葛西は涼の姿を見て、ほっと息を吐いた。

「さっきまで黒瀬がいた。何か用？」

「絵を見に来たんだ。やつぱり黒瀬も来ていたんだな。教室に鞆があったから、ここかと思って」

涼は先程まで千尋がいた場所に立った。葛西はその涼の位置を見て微妙な笑みを零し、筆を置いて片付け始めた。涼は葛西がいつも

のように明るく振舞わないことに首を傾げた。いつもとは何か違って
いる。噛み合わない歯車のように、何かがずれ始めていた。

涼は、筆を洗いパレットを片付ける葛西に真剣な低い声で言った。
「何があっただ」

「何もない。だからこそ、何かがあるのが怖いんだ」

自嘲気味に笑った葛西に、涼は顎を引いた。葛西が何かを隠して
いることはわかる。しかし、涼は無理に聞こうとは思わなかった。
言わないということは、それを確信しているわけではないからか、
涼が知るべきことではないかのどちらかだった。

涼は葛西が手に取った絵を見て、一言漏らした。

「雨の絵…ね」

葛西はその声が聞こえなかった振りをした。

16・物語が進んでいく

千尋は美術室を出た後、当てもなく歩いていた。何処へ向かうでもなく、足は動く。千尋は葛西に言われたことを思い出し、胸が締め付けられるのを感じた。

「黒瀬！」

後ろから掛かった声に、千尋は振り向いた。涼が廊下を走ってくるのが見えた。千尋は思わず目を逸らしたが、一度目を閉じてから涼に向き直った。

涼は千尋の前に立った。

「何かあったのか？」

「別に何も」

突き放すように笑った千尋に、涼は怪訝な顔をした。千尋と葛西は共に何もなかったが、二人の様子から何もなかったはずはない。

涼は問い詰めようと口を開いた。しかし、声は出ずに、体が前へと倒れた。

「泉水くん!？」

千尋の声が聞こえた後、涼の意識はなくなった。

千尋は倒れ込んできた涼を受け止め、暫く放心していたが、状況を理解すると、涼の腕を肩に回して引き摺るように保健室へと運んでいった。

風が頬を撫でる感触で、涼は目を覚ました。薬品の臭いが鼻を掠める。そして、微かに風が淡い旋律を乗せてくる。涼はそれがどこから聴こえるのかと顔を動かしたところに、千尋がいた。

千尋は涼が寝ているベッドの横の椅子に座り、窓を開けて外を眺めていた。千尋の口から紡ぎ出されるのは、涼との接点だった。

「マザー・グース…」

涼の声を千尋は聞きつけた。千尋は窓から視線を涼へと移し、柔らかに笑った。

涼は夢の続きかと思った。

「気がついた？ 寝不足で倒れたんだよ」

千尋はそのままの表情で、涼の顔を覗き込んだ。千尋は眼鏡を外しているため、遮るものがない。涼はまだはつきりしない頭で、千尋を見た。

「黒瀬って歌、上手いんだな…」

「泉水くんには及ばないけどね。これも嗜みの一つだよ」

千尋は薄く笑い、横に用意してあった水差しからコップに水を注いだ。千尋の動作一つ一つが丁寧で、優雅に見えた。涼は体を起こし、コップを受け取った。

「黒瀬って動作が丁寧だよな」

「羨まれたからね。母親が茶道を嗜んでいて。丁寧に見える動きは、そこから来ているんだよ。食べ方とか、歩き方とか」

「綺麗だな」

あつさりと言った涼に、千尋は動きを止め、その後に悔しそうに涼を睨んだ。心なしか、頬が赤く染まっていた。

「…なんでそう言うかな」

「本当のことだから。自分に出来ないことを出来る黒瀬が凄いなって」

嘘ではないと言うように涼は簡単に言い、水を口に含んだ。冷たい水が喉を通る。それを心地良く感じながら、涼は千尋を見た。

千尋は諦めたように息を吐き、口元を緩めた。

「有難う。そう言われたのは初めてだよ。いつもは優等生とか、嫌みだとか言われてたから」

素直に褒めるのは大人だけだった。同年代は、自分に出来ないことを羨む。そして、酷いことを平気で言う。千尋はそんな反応に慣れていた。傷付いてはいないと言えば嘘になるが、気にしないこと

くらいは出来る。千尋は涼から空になったコップを受け取り、元に戻した。

穏やかな空気が流れる中、ドアを開ける音が大きく響いた。

「大丈夫か、泉水。倒れたって聞いて…」

「大丈夫。寝不足で倒れたただけだからさ。こっちだ」

葛西は声の聞こえた方の、カーテンで仕切られたベッドへと向かった。葛西がカーテンを引くと、涼は楽しそうな顔で、千尋は眼鏡を外した笑顔を浮かべていた。

「元気そうだな。安心した」

葛西は気が抜けたようにベッドの端に座った。葛西の手には紙が二枚あり、それを涼は見咎めた。

千尋も涼の視線から気付き、指でそれを示した。

「何？ それ」

「ああ、コレか。まだ途中だけど、あの絵の写真を撮ってきた」

千尋が示した紙は写真で、ポラロイドカメラで撮られた写真は絵が浮かび上がってきているところだった。葛西が写真を撮って急いで保健室に来たのがわかる。

葛西はベッドに二枚の写真を置いた。

「並べて見て欲しい理由、わかるか？」

千尋は雨の絵の写真を取り、涼は夕焼けの写真を取った。二人がそれぞれ手に取った写真を見て、葛西は含み笑いをした。

その葛西の笑いに涼は気付き、千尋は気付かなかった。千尋はまだ仕上がっていない方の雨の絵を見入っていた。

涼は千尋の様子に苦笑し、写真を人差し指を中指で挟んで葛西の目の前に掲げた。

「寒色と暖色：対極の位置にあるけど」

「それでも、互いに優しい」

涼の言葉に、千尋が続けた。葛西は正解、とでもいうように指を鳴らした。そして涼から写真を受け取り、ひらひらと振った。

「それ、お前らなんだ。ちょうどそれを持ってた通りに、夕焼けが

泉水で、雨が黒瀬。綺麗だろ？」

してやったり、とニヤニヤ笑う葛西に、涼は溜息を吐いて笑った。千尋は照れたように葛西を睨み、写真を返した。

絵は確かに綺麗だった。しかし、それが自分だと言われると、千尋には歯痒かった。涼は特に気にせず、ベッドの上で背に枕を挟んで凭れていた。

千尋は苦笑した。

「嬉しいけどね……」

「恥ずかしいだろ？ 前に一回、雪を俺のイメージだって描かれたから、免疫が付いた。でもまあ、悪くは思われていないみたいだからいいけど」

涼の投遣りな言い方に、葛西はそれを思い出して可笑しそうに笑った。こんなときはいつも千尋は取り残される。二人の過去は知らない。しかし、葛西はその話題を続けようとせず、表情を改めて涼に真剣に向き合った。

「寝不足で倒れたって言うてたよな？ なんでだ？」

葛西の疑問に、千尋も後押しするように頷いた。二人の視線を受けて、涼はふっと破顔した。

「大した理由はないよ。ただ、小説を読んでいて、止まらなかっただけ」

下らない理由に葛西は脱力して顔を下に向け、千尋は安心したように失笑した。

このとき、涼は何かの意味を含んだ笑いを浮かべていたが、二人にはその真意を知ることが出来なかった。

涼は、夢で千尋に逢うことが怖かった。自分の気持ちが悪くても変化するのを感じてしまう。しかし、それ以上に楽しみにしていた。今、現実には眼鏡を外している千尋を見て、胸が高鳴っている自分がそこにいた。

17・全ては偽物で

雨の絵が仕上がったと葛西から聞き、涼は放課後一人で絵を見に行こうとした。教室に千尋の姿はなかった。美術室へ向かう廊下の途中で、聞き覚えのある声を聞いた。

その声は一年生の教室から聞こえる。微かに漏れる声は、その教室にいるはずがない人物のものだった。

涼は消えそうなほど小さな声を、聞き逃さなかった。人物に検討をつけ、そっとドアを開けた。音楽室での出来事と重なる。

「…大丈夫みたい。そのせいじゃないよ」

ドアの隙間から見えたのは、思ったとおり千尋だった。携帯電話で話す声は親しみが込められており、どこか楽しそうだった。

涼は盗み聞きするつもりはなかったが、声を掛けるタイミングを外し、そのまま話を聞いていた。

「…うん、上手くいつてる。もうすぐ叶う。次は何を入れよう…駄目だよ。姉さんだって共犯なんだ。悪くはないよね？MDで催眠効果が上手くいくって実証できたんだから」

息が出来なかった。涼は何を言われたか理解するよりも速く、体は反応した。頭が痛くなるのを感じながら、涼はゆっくりとドアを開けた。

その音に千尋は振り返り、涼を見て目を見開いた。そして、耳まで持ち上げていた携帯電話を持つ手を落とした。携帯電話からは相手の声が漏れていたが、気にする余裕はなかった。

千尋はボタンを押して強制的に通話を終わらせ、涼の顔を窺った。涼は冷たい笑みを浮かべた。

「楽しかったか？俺がお前を好きになつていくのを見ていて。黒瀬を恋愛対象として見ていくのを見ていて」

「違う！そのためにやったわけじゃない！」

涼の感情のない声に重なるように、千尋は勢い良く言った。涼は

表情を変えず、温度の下がっていく笑みを顔に貼り付けていた。

MDでの催眠効果。涼の夢に千尋が出てくるようになったのは、MDを聴き始めてからだった。すぐに千尋が出てきたわけではなかったが、今までの経緯から考えればそうとしか思えなかった。描写が細かいのも理解出来た。千尋が作っていたからこそ、眼鏡を取った顔さえも寸分変わらず構成されていた。夢の中の千尋の様々な要求。それは自分をからかうためのものだ、涼は思った。恋愛対象として好きになるように仕向けられていた。そうとしか、思えなかった。

「じゃあ何のために？」

「声が聴きたかった。ただ、それだけだよ」

泣きそうに微笑んだ千尋に、涼は冷たい笑みを返した。怒りを表してくれれば対処できるのに、涼はそれを許さなかった。責めもせず、突き放す。千尋はその距離が怖かった。

涼は調子を変えない、いつもの声で言った。

「それなら、ここまでする必要はなかったはずだろ。理由は明確だからかっていたとしか思えない」

「違う違う違う！」

「違うない」

きつぱりと否定した涼は、笑みを凍りつかせたまま腕を組んだ。品定めをするような涼の態度は拒絶を示していた。胸の前で組まれた腕は千尋を拒んでいる。

千尋は諦めたように顔を下に向け、机の上に置いていた鞆を手に取った。鞆の中から一枚のMDを取り出し、涼に投げた。それを涼は難無く受け取った。

「催眠を解除するMDだよ。これで、全てが終わる」

涼は頷き、体を反転させて出口へと向かった。廊下に足を踏み出すとき、後ろから声が聞こえた。

「ただ、名前を呼んで欲しかった」

千尋はそれ以外は何も言わず、動かなかった。

その言葉が涼の頭の中で響いた。

夢に千尋は出てこなかった。

18・残ったものは本物だった

「そういうことか」

涼はベッドに横たわったまま、額に手の甲をつけて呟いた。MDを聴いて、涼の気持ちは変わった。前と違うMDは、確かに変な霧のようなものを消した。

後に残ったのは、明確になった想いだけだった。

「もう嘘はつけない」

涼は口の端を上げた。そして携帯電話を取り出し、電話を掛けた。数回のコールで相手は出た。

『なんだよ…泉水』

「悪いな、朝早くに。起こしたか？」

『嫌、起きるところだったからいい。で、何の用だ？』

欠伸を噛み殺した葛西に、悪いと思いながら涼は口を開いた。

「あのMD、黒瀬からのものだったんだ」

『…それで』

「あの中には細工がされていて、俺が黒瀬を好きになるように催眠効果が施されていたんだ」

葛西の息を呑む音が聞こえた。涼は淡々と説明を続けた。

「昨日、催眠を解除するMDを貰って聴いた。いつも夢に出てきていた黒瀬は出てこなかった」

『ごめん、泉水。黒瀬がMDを入れているところを見てたんだ』

「いや、この結果は変わらなかったはずさ。気にしなくていい。これではつきりした」

『何がわかったんだ？』

葛西の問いかけに、涼は笑った。その笑い声を聞き、葛西は涼がおかしくなったのかと思った。しかし、涼は楽しそうに笑ったまま、話を続けた。

「黒瀬のことが好きみたいだ。恋愛感情として」

涼はきつぱりと言い、葛西は沈黙した。涼は嫌われたかと思ったが、そのまま通話を続けた。

涼が声を掛けようとしたとき、葛西の笑い声が聞こえた。爆笑と言っても過言でないほど、葛西の笑い声は大きかった。

『心配して損した。なんだ、良かったじゃないか。傷付かずに済んで』

飽くまでも涼の心配をする葛西に、涼は失笑した。

「俺と黒瀬が付き合うことになったらどうする？」

『別に。関係ないだろ？俺は第三者なんだから。当人でやってくれ』

突き放すような言い方は、偏見がないことを示していて、涼は笑みを深くした。友人が、しかも同性が付き合うことになっても気にしない葛西。そんな葛西だからこそ、近くにいても不快だったことはなかった。

「でも、黒瀬の気持ちを聞いていないから、何も言えないけど」

『それだけのことをされて、わかっていないわけじゃないだろ？』

「はつきり言われないと」

『：お前から言う気はないんだな』

深く溜息を吐いた葛西に、うん、と涼は軽く返した。葛西は呆れたように笑い、優しい声で言った。

『それでも嫌いじゃないんだ、お前のことは。もちろん黒瀬もな』

葛西は通話を終了させた。

涼は普段通りに登校した。靴箱を確かめると、千尋は既に来ていた。涼は顔を引き締め、教室へ向かった。

静かに教室のドアを開けると、その音に反応した千尋が振り向いた。視線が合い、千尋は逸らした。

「黒瀬、話がある。移動しよう」

涼の提案に、千尋は何も言わずに従った。一度も振り返らずに、

涼は一直線にある場所へと向かった。千尋はどこへ向かっているのかわかり、胸が締め付けられるような痛みを感じた。

涼は教室に入った。目の前にはピアノがあった。

「催眠は解けた。変な霧がなくなった。気持ちも、変わった」

「…それで」

千尋は決められた位置であるかのように、ピアノの前へ座った。

涼はいつもとは違ってピアノに寄り、凭れた。

千尋は蓋を開けて鍵盤をなぞった。音が出ないほどの軽い動き。

それを涼は含みのある笑いを浮かべて見ていた。

涼が何も言わないことを不思議に思った千尋は顔を上げた。千尋の目に映ったのは涼の不可解な笑みだけで、その後唇に何か当たるのを感じた。

涼の顔が離れて、千尋はその正体がわかった。

「それでも好きだったよ、千尋」

名前で呼んだ涼に、千尋は複雑に笑った。

「その『好き』の意味って…」

「何だろうな？」

曖昧な返事をした涼は、戸惑っている千尋をそのままに、教室を出ていった。

残された千尋は、混乱する頭を整理しようとした。唇に残った感触だけが、はつきりと理解できた。

「性格悪いよな」

教室を出たところで涼は葛西に声を掛けられた。葛西はドアに体を預け、顔を歪めていた。涼は葛西が話を聞いていたことを察した。涼は意地の悪い笑みで返した。

「そうかな？否定はしないけど」

「楽しそうなお前を見てれば、好きの意味なんて自然にわかるのにな」

葛西の正解を含んだ言葉に、涼は純粹な笑みを浮かべた。簡単な答えだった。それをどちらが先に言うかの問題だった。それを言うてしまえば、全てが変わる。それは決まっていることだった。

涼はこれから起こることが悪くはないことを確信し、一人ほくそ笑んでいた。

おまけ：葛西の彼女

「紹介するのが遅れたけど」

「初めまして、諏訪小百合です」

葛西晃一の隣には、モデルと言っても通用しそうな美人がいた。

「いつから？」

「春から付き合ってる」

葛西の嬉しさを隠そうとしている表情に、涼は苦笑を漏らした。そして、小百合に向き合い、爽やかに笑った。

「泉水涼です。葛西をわかってくれる人がいて、嬉しいです」

「うーん晃一くんに聞いていたとおり、面白い人ね。私も君みたいな理解者がいて嬉しいわ」

小百合は屈託なく笑みを浮かべた。葛西たちとは五歳差なのに、距離を感じさせない笑みだった。

会う前に、葛西は両方に簡単な説明をしていた。小百合のこと、涼のこと。涼については、恋人のことまで話していた。

「黒瀬千尋です。葛西くんから説明は…」

「うん。泉水くんの恋人だよ」

あっさりと言った小百合に、涼と千尋は顔を見合わせた。それを見た葛西と小百合も顔を見合わせ、同時に笑った。

葛西は困ったように、小百合は楽しそうに笑ったまま説明した。

「私の親友がね、男同士で恋人関係なの。一人には恋してたけど、今ではどっちも大切な親友。そういうわけで、変だと思わないわよ」

「で、俺は小百合さんの親友に会ってたから、泉水たちに偏見はなかったんだ」

千尋は納得したように頷いた。隣で涼もへえ、と顎に手を置いている。

葛西と小百合の逢いは、コンテスト受賞の絵が展示されている

会場だった。そのコンテストで葛西は佳作を受賞し、表彰式後に小百合が声をかけた。

葛西は小百合を見て初めて人物画を描きたいと思い、小百合に頼んだ。小百合は自分が惹かれた絵を描いた人が、自分をどう描くか興味があり、迷うことなく引き受けた。

その後、何度も会っている内に、互いが離れ難くなっていき、付き合うことになった。

「小百合さんの親友に会ったのが泉水から電話があった日の一週間前で、運命感じたな」

「そうだったんだ…。うん、運命ね。そう思いたいかな」

涼が幸せそうに言ったのに対し、千尋は揶揄ったそうに苦笑を漏らし、葛西は愉快に笑った。

いつの間にか広がっていく繋がり。誰が中心になっているのかわからないほど、偶然で、運命的に交差する。

「世間は狭いつて言うしね。今度は泉水くんに親友を紹介したら、隠れた繋がりが見付かるかも」

小百合の意味深な発言に、三人は顔を見合わせた。

まだ、どこかで誰かが繋がっている。

おまけ：葛西の彼女（後書き）

「最後の最後に逢う運命」の後の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8958c/>

絶対音声

2010年10月8日14時50分発行